

# 喜界島の言語文化保存活動と グローバル市民教育

グローバルイシュー  
—地球的課題としての消滅の危機言語問題—

西村 淳子

世界中で多くの言語が消滅の危機に瀕している。2009年ユネスコは *Atlas of the world's languages in danger* (『危機的な状況にある世界の言語地図』<sup>1</sup>) において、日本においても8つの言語<sup>2</sup>が消滅の危機に瀕していると発表した。グローバル化に伴い、人々の生活が広域化する中で、地域の言語文化が次第に失われつつある。人々は、広域での生活を可能にするために、共通の言語(日本では日本語の標準語、世界では英語)を学ぼうとするのであるが、もし、同時に長い歴史の中で育まれた地域の言語文化を失いつつあるなら、私たちは自分自身が何者なのかを見失うだけではなく、自らが自分らしい仕方でもグローバル社会に貢献し、社会に求められる存在になるための可能性をも失いつつあるのではないだろうか。私たちが自分のもっともよい所を活かして社会に貢献するには、他者と共通するものだけではなく、異なる個性を持っている必要があるからである。生物多様性の問題が地球的課題であることは、現代では広く認知され、地球温暖化防止、環境保全などの取り組みの必要性は誰もが認めるところである。しかしながら、

<sup>1</sup> Christopher Moseley, (éd), *Atlas of the world's languages in danger*, 3<sup>rd</sup> ed., UNESCO, 2010. なお、本書第3版の内容は、2009年2月発表されたが、書籍は2010年に出版されている。本稿では、第3版のフランス語版 *Atlas des langues en danger dans le monde*, UNESCO, 2010 に依拠した。なお、この本の内容はインターネットにも公開されており、補足的な情報も提供されている。Interactive Atlas of the World's Languages in Danger : <http://www.unesco.org/languages-atlas/>.

<sup>2</sup> アイヌ語は、安全度6段階中下から2番目の安全度1。八重山語、与那国語が安全度2、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語が評価3とされ、消滅の危機に瀕しているとされた。

言語文化の多様性に関しては、研究者や専門家たちからの強い訴えがあるにもかかわらず、一般の人々の意識に定着しているとは言い難い。言語の消滅という現象は、人類の歴史の中で数限りなく繰り返されてきた事であり、当然のこと、あるいは、仕方がないこととして受け入れるべきであると考える人は多いが、本稿では、言語の消滅が単にその言語の話者にとっての損失であるだけではなく、社会にとっての損失であること、そして、グローバル化が避けがたいことだとしても、それが世界の貧困化に繋がらないためにはどうすればよいのかを考えて行きたい。

本稿でとりあげるのは、日本にある消滅の危機言語とされた8つの言語の一つ、奄美語の一種である喜界島の言語である。この言語を取り上げた理由は、まさに、言語を消滅の危機から救う意志をもった人々が積極的に活動を行っているからである。自らが生まれ育った地域の言語文化を消滅の危機から救い、守り育てようとする活動は、ともすればグローバル社会に飲み込まれて、自分が獲得してきた言語文化を見失ってしまいそうになる都会の人々にも、誇りを取り戻し、主体的に社会に貢献するためのヒントを与えるものになるであろう。

2019年6月3日、喜界島言語文化保存会代表の生島常範氏による講演「喜界島の言語と文化」が武蔵大学（東京都練馬区）で行われた。その講演に対する学生のアンケート結果から、現代の人々がグローバル社会で生きるために気づかなければならないことはなにかを考えていきたい。

## 1. 消滅の危機言語とはなにか。

世界にはおおそ7千の言語が存在すると言われていたが<sup>3</sup>、その中で、消滅の危機に瀕しているとユネスコの報告書が挙げているのは、2500言語から3000言語に及ぶ<sup>4</sup>。日本においても、当然各地域の言語文化の研究はなされてきたのであるが、言語の消滅が世界的な規模で起こっている現象であり、地球的課題であるという認識を示すという点に関しては、ユネスコの『危機的な状況にある世

---

<sup>3</sup> 「国際 SIL」が2020年現在公表しているところによると、世界の言語は7111である。<https://www.sil.org/worldwide>。国際 SIL とは、1934年に設立された、世界の言語調査を行い、*Ethnologue* を発行しているキリスト教系の研究機関。ユネスコ、国際連合の諮問機関でもある。

<sup>4</sup> Christopher Moseley, (éd), *Op.Cit.*, 2010.

界の言語地図』の貢献が大きい。世界的な視野に立つと、ヨーロッパ評議会が1992年に調印した「地域語および少数言語のための言語憲章」*Charte Européenne des langues régionales et minoritaires*は、国家の公用語以外の地域語や少数言語の使用を公的に奨励する試みであり、多様性を富として国家の枠組みを超える秩序を生み出そうとしたEUヨーロッパ連合の理念を言語において具体化した試みであった<sup>5</sup>。このように世界が国家を超えて交流や結びつきを求めれば求めるほど、それぞれの価値の尊重が重要な課題となっていたのである。

ユネスコが行ったことは漠然とした問題提起に留まらず、具体的にそれぞれの言語の活力を計測する指標を示し、その指標を用いて各言語の活力を評価し、発表した<sup>6</sup>。そこに挙げられた「言語の活力を決める指標」は以下の9点である。

- (1) 世代間の継承がなされているか
- (2) 話者の絶対数
- (3) コミュニティーの総人口に占める話者の割合
- (4) 従来の生活領域におけるその言語の使用状況
- (5) メディアなどの新しい生活領域での使用状況
- (6) 言語教育、読み書きを教えるための教材があるか
- (7) 国の言語政策
- (8) コミュニティー内での言語に対する態度
- (9) 言語記述の質と量

各指標につき言語存続の安全度を、5「安全」、4「脆弱」、3「危険」、2「深刻な危険」、1「極めて危険」、0「消滅」の6段階に評価する。各段階が具体的にどのような状況に対応すると評価されているのか、その詳しい内容は、表1を参照していただきたい。

---

<sup>5</sup> 「地域言語または少数言語のためのヨーロッパ憲章」 <https://rm.coe.int/168007c07e>。この憲章では、地域語、少数言語は、コミュニケーションの障害ではなく、逆に文化的財産と考え、教育、司法、行政、メディア、文化活動、経済、社会的活動、国際的活動の各分野において、言語の使用を奨励する政策が提案されている。詳しくは、西村淳子「ヨーロッパ多言語主義の可能性」『ヨーロッパ学入門』（武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文学科編）pp.137-139。

<sup>6</sup> UNESCO ad Hoc Expert Group on Endangered Languages, “Language Vitality and Endangerment”, Document submitted to the International Expert Meeting on UNESCO *Programme Safeguarding of Endangered Languages*, Paris, 10-12 March 2003.

表 1-a 言語の安全度を測る指標<sup>7</sup>

安全度	(1) 世代間の継承	(2) 話者の絶対数	(3) 総人口に占める話者の割合	(4) 従来の生活領域で使用される場面。
5 安全	子どもを含めあらゆる世代に話されている。		全員がその言語を話している。	日常的使用 すべての場面で、すべての目的に使用されている。
4 脆弱	すべての分野でその言語を話す子どもがいる。限られた分野ではすべての子どもがその言語を話している。		ほぼ全員がその言語を話している。	多言語間に均衡がある。 二つ以上の言語が共存しているが、公的な場面では支配的な言語が使われ、私的な場面では地域の言語が使用される傾向がある。
3 危険	その言語は、親の世代以上に話されている。		話者は多数派	衰退傾向にある。 家庭では使用されているが、支配的な言語も家庭で使われ始めている。年齢の人々には地域の言語だけを使う人もいる。
2 深刻な危険	その言語は、祖父母以上の世代に話されている。	数値的な基準はないが 少人数のコミュニティーは常に消滅の危機にさらされている。	話者は少数派	言語使用が限定された社会領域や役割のみ。 被支配的な言語は、使用の場を失いつつある。家庭でも親は日常会話に支配言語を使い始めている。子供はその言語を完全に話さないセミスピーカー。親が支配的言語も地域の言語も話せるバイリンガルである。地域の言語が積極的に使われている家庭では子供たちもバイリンガルである事もある。
1 極めて危険	その言語は、曾祖父母の世代のわずかな話者にしか使われていない。		話者はわずか。	ごく限られた場面で、わずかな目的に使用されている。
0 消滅	その言語の話者はいない。		誰もその言語を話していない。	消滅。 どんな場面でも、どんな役割にも使用されていない。

<sup>7</sup> この表は、同文書（2003）を元に作成、木部暢子他『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』第3章「消滅の危機の程度に係わる判断基準・根拠について」（木部暢子・山田真寛）を参照した。

表 1-b 言語の安全度を測る指標

安全度	(5) 新しい生活領域、メディアなどでの使用	(6) 言語教育に利用可能な言語資料がどの程度あるか。	(7) 国の言語政策	(8) コミュニティ内での言語に対する態度	(9) 言語記述の量と質
5 安全	新たな領域では、あらゆる場面で使用されている。	書記法が成立している。文法、辞書、文献、文学、日常のメディアなど、読み書きの伝統がある。行政、教育で使用されている。	<b>平等なサポート</b> 国内のすべての言語が法的に保護されている。政府は、明確な法律ですべての言語の維持を推奨し、履行している。	みな地域の言語を高く評価し、推奨されることを望んでいる。	包括的な文法、辞書、広範囲の文献がある。注釈のついた上質の視覚資料が豊富にある。
4 脆弱	ほとんどすべての新しい場面で使用されている。	文字資料が存在し、子どもたちは学校で言語使用を学んでいる。行政の書き言葉では地域の言語ではない。	<b>格差のあるサポート</b> 少数言語は家庭内など私的な領域で使うことが奨励されている。儀式などにおいて権威ある言語とされることもある。	ほとんどの人がその言語の保存を望んでいる	質のよい文法が一つある。また、適切な文法、辞書、文献、文学が存在し、上質な録音、録画がある。
3 危険	多くの新しい場面で使用されている。	文字資料が存在し、子ども達は学校でそれに触れる機会がある。書き言葉では、その言語の使用は、推奨されていない。	<b>過激的同化</b> 多数派グループは少数言語が使われているかどうかに関心、相互理解のための言語は多数派の言語。少数言語は権威を持っていない。	多くの人がその言語の保存を望んでいるが、無関心な人や言語の消失を望む者もある。	適切な文法や、辞書、文献がある。音声やビデオ録画などの質や注釈の程度はさまざまである。
2 深刻な危険	新たな場面で使用されることがある。	文字資料は存在するが、コミュニティの一部の者しか利用しない。他のメンバーにとっては、言語が象徴的な意味を持つことがある。その言語は教育カリキュラムには組み込まれていない。	<b>過激的同化</b> 政府は教育を多数派の言語で行い、少数派グループに自分の言語を放棄するよう促す。少数派の言語を話すことも書くことも奨励されない。	地域の言語の保存を望んでいる人もいるが、無関心な人や言語の消失を望む人もいる。	限られた範囲の言語研究に役立つ断片的文法、語彙リスト、文献はあるが、範囲は十分ではない。注釈もある場合とない場合がある。
1 極めて危険	新たな場面で使用されることは少ない。	実用的な書記法はコミュニティに知られており、文字資料が存在する。	<b>強制的同化</b> 政府は、支配的言語が国の唯一の言語であると宣言し、少数派グループの言語は認知も支援しないという明確な政策を掲げている。	その言語の保存を望んでいる人は少ない。無関心な人や言語の消失を望む者もいる。	断片的文法が少し、小さな語彙リスト、文学の断片はあるが、録音、録画は質の悪いものしかない。注釈もほぼない。
0 消滅	新たな場面では使用されていない。	書記法は存在しない。	その言語の使用は禁止されている。	言語の消滅にだれも感心がない。全員が支配的言語の使用を望んでいる。	資料はない。

## 2. 日本における消滅の危機言語研究

日本においても、2009年のユネスコの発表を受けて、文化庁が危機的な状況にある言語・方言の実態調査を、国立国語研究所、北海道大学、琉球大学に委託した<sup>8</sup>。委託を受けて、2010年度には、国立国語研究所<sup>9</sup>が危機言語の実態調査を行った<sup>10</sup>。また、2012年には、北海道大学がアイヌ語を調査<sup>11</sup>、琉球大学も奄美方言、宮古方言、与那国方言に対する調査を行った<sup>12</sup>。八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言に関しては、2013年に琉球大学<sup>13</sup>が、2014年には、国立国語研究所が調査している<sup>14</sup>。

それ以前の方言研究に関しては、『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』（木部暢子他 2011年2月）に文献目録が作成されている<sup>15</sup>。

## 3. 沖縄県与那国島、沖縄県多良間島、鹿児島県喜界島、鹿児島県甬島の言語実態調査

消滅の危機言語の実態をもう少し具体的に知るために、2010年、国立国語研究所が、沖縄県与那国島、沖縄県多良間島、鹿児島県喜界島、鹿児島県甬島の4

---

<sup>8</sup> 文化庁ホームページ「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 及び危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究」

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/jittaichosa/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittaichosa/index.html)

<sup>9</sup> 国立国語研究所は、1948年に設立された日本語研究機関であるが、全国的な方言調査を、それまでも2回行い、その成果を二つの方言地図として発表している。

『日本語地図』全6巻（1966年～1974年）300枚の方言地図

『方言文法全国地図』全6巻（1989年～2006年）350枚の方言地図

<sup>10</sup> 木部暢子他 前掲報告書、2011年2月。

<sup>11</sup> 北海道大学によるアイヌ語調査報告書 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo\\_hokkaido.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo_hokkaido.pdf)

<sup>12</sup> 琉球大学による奄美方言、宮古方言、与那国方言の調査報告書 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo\\_ryukyu.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo_ryukyu.pdf)

<sup>13</sup> 琉球大学による八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言の調査報告書 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo\\_ryukyu\\_h26.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo_ryukyu_h26.pdf)

<sup>14</sup> 国立国語研究所による八丈方言、国頭方言、沖縄方言、八重山方言の調査報告書 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo\\_kenkyu\\_h27.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/jittaichosa/pdf/kikigengo_kenkyu_h27.pdf)

<sup>15</sup> 下地賀代子「消滅の危機にある言語・方言に関する資料一覧」、木部暢子他、前掲報告書、2011年2月、pp.99-125。

表2 与那国島、多良間島、喜界島、甌島の言語の安全度

言語名	(1) 世代間の継承	(2) 話者の絶対数	(3) 総人口に占める話者の割合	(4) 従来の生活領域で使用される場面。	(5) 新しい生活領域、メディアなどでの使用	(6) 言語教育に利用可能な言語資料がどの程度あるか。	(7) 国の言語政策	(8) コミュニティー内での言語に対する態度	(9) 言語記述の量と質	平均 ( )内はユネスコの評価
喜界方言	3	5,924	3 (73.2%)	2~3	1	2	2~3	2~3	2	2.21~2.5 (3)
与那国方言	3	393	2 (35.0%)	2~3	0	1	3	2~3	2	1.88~2.13 (2)
多良間島方言	3	2,133	3 (70%)	2~3	0	1~2	3	2~3	2	2~2.38 (3)
甌島方言	3	3,210	2 (51.7%)	2~3	0	2	2	1~3	1	1.625~2

地域を対象に行った言語の使用実態の調査に着目する<sup>16</sup>。この調査では、4地域の言語の危機の程度をユネスコの指標に従って評価している。

評価結果を纏めると、2010年時点での結果は表2の通りである。

(1) 世代間の継承に関しては、すべての地域で評価3（危険、すなわち、「親以上の世代に話されている」）40代、50代の人たちは理解できるが、20代以下の青少年は理解できない。

(2) 母語話者数は、喜界島がもっとも話者が多く（5,924人）、与那国島は圧倒的に少ない（393人）。

(3) コミュニティ内での総人口に占める話者の割合

喜界島と多良間島が評価3（70%以上）、甌島（51.7%）と与那国島（35%）は評価2である。与那国島の地域語話者の少なさは、島の総人口の内、方言を話せるのが35%（評価2）と極めて低くなっているからであろう。

(4) 使用される場面

どの島もほぼ2（限定的場面での使用）～3（衰退傾向にある）という評価である。つまり、親の世代、祖父母の世代も公的な場面では用いず、儀礼など決まった表現をそのまま用いる「形式的使用」が見られる。

(5) 新しい生活領域、メディアでの使用

喜界島にはインターネット・ラジオ「ラジオ喜界島」があり、鳥唄などの情報発信があるので、評価1、その他の地域では方言での発信はない

<sup>16</sup> 木部暢子他 前掲報告書（2011年2月）、pp.43-97。

ので、0の評価がされている。

(6) 方言を教えるための教材

どの方言も書かれたテキストはある程度存在するが、書記法が定まっていない。そのため、評価は、喜界島と甑島で2、与那国島、多良間島では1～2と低い。参考事項として、特記されているのは、与論島の例で、島の出身者が作成したテキストが存在し、学校教育で使われている（評価4）。しかし、時間は、月数時間程度と短い。

(7) 国の言語政策

すべての島で、大正時代から1975年前後まで学校で方言の使用が禁じられた。「方言札」<sup>17</sup>という罰則が喜界島や甑島では見られたため、2～3という評価であり、国家の公的な保護政策はない。

(8) コミュニティー内での言語に対する態度

島によって事情は少しずつ異なるが、共通していることは、親の世代が学校教育での方言禁止を経験しているため、「方言は悪いことば」という意識が残っていることである。しかし、事実子どもの世代が方言を話さなくなっているため、方言に対する否定的な感情は薄れ、存続を願う人も多くなっているようである。しかし、そのための具体的な活動は多くはない。評価は、甑島が1～3、その他の地域では、2～3。

(9) 言語記述の量と質

甑島は評価1、その他は2。どの地域も、限定的な文献は存在するが、総括的なものではない。

調査の結果をユネスコの評価と比較すると、総じて、2010年の国立国語研究所による評価の方がユネスコの評価よりも低い評価となっている。消滅の危機が高まっていることが推測できる。

このような大規模な調査とは別に、文化庁は「危機的な状況にある言語・方言

---

<sup>17</sup> 学校で方言を使用したときに罰則として掛けられた札。



サミット」を2015年から2019年まで5年に渡り、5回開催している<sup>18</sup>。

#### 4. 喜界島の言語の研究

喜界島は、鹿児島県の南、九州本島と沖縄との中間に位置する奄美群島に属する隆起珊瑚礁の島である。33の集落があり、人口は、2020年現在で6,880人である<sup>19</sup>。喜界島の言語は、日本語（本土方言）と系統を同じくする琉球語の一種である奄美語に属する。

国立国語研究所は2010年、上記の言語実態調査とは別に、同時期に喜界島の言語について詳しい調査を行い、報告書を纏めている<sup>20</sup>。研究の対象となったのは、音韻体系、アクセント、格の体系、系統、数詞のアクセント、オノマトペで、基礎語彙データ、アクセントデータ、文法データを作成、関連文献の文献表を作成している。この研究は、集落ごとに大きな違いのある喜界島の言語の現状を直接の聞き取りによって忠実に記述しており、体系的な分析を行っている。2010年以降これほど大規模な調査は行われていないが、個別の研究者によって調査が継続されている。

ここで言語学的に専門的な内容には立ち入ることはできないが、島外の人も喜界島の言語がどのようなものかをイメージできるよう、上の報告書を参考にいくつかの特徴的な事象を挙げよう。

- ・喜界島のことばを日本語の話者が聞いても理解できないほど、音韻、語彙などにおいて標準語からの隔たりが大きい。

<sup>18</sup> 2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のために中止となった。

[https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\\_nihongo/kokugo\\_shisaku/kikigengo/summit/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/summit/index.html)

<sup>19</sup> 鹿児島県喜界町公式ホームページより。

<https://www.town.kikai.lg.jp/juki/machi/gaiyo/gaiyo/jinko.html>

国立国語研究所の調査が行われた2010年の人口は8,572人。日本の総人口の減少はこの10年で1.6%であったのに比較すると、喜界島の人口の減少は20%と極めて高く、言語を担う可能性のある人口も減少が著しいことが明らかである。総務省統計局「人口推計2020年10月報」より。

<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/pdf/202010.pdf>。

<sup>20</sup> 木部暢子他「消滅の危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書」2011年8月。<https://www2.ninjal.ac.jp/past-projects/endangered/report/kikaijima.html>

- ・しかし、調査においても常に日本語との対応関係を説明に用いるなど、日本語とは体系的な対応関係が認められる。
- ・小さな島にもかかわらず、集落ごとの違いも大きく、北部の方言と南部の方言で大きな違いがある。
- ・日本語の古い形が喜界島の言語に見られる。例えば、北部の [p] は古代日本語と同じで、中部の [ɸ] は平安時代の日本語と同じ、南部の [h] は江戸時代の発音と同じで、日本語のハ行子音が歴史を辿るように凝縮されている。
- ・日本語には無声音 [p, t, k] と有声音 [b, d, g] の区別しかないが、喜界島では、無声音に有気非喉頭化音 [p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, k<sup>h</sup>] と無気喉頭化音 [p', t', k'] の区別がある。

因みに、喜界島の言語を日本語の方言と見なすか、日本語とは異なる別の言語と見なすかという問題があるが、これを決めるのは、相互理解が可能か、あるいは、同一系統かなどの言語学的な要因に加えて、関係を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかなどの政治的、社会的な要因が関わり、だれもが同意できるような正解は存在しないとも言える。ただし、ユネスコや国際 SIL のように外から日本語も喜界島の言語も考察する立場に立つと、政治的、社会的問題を回避し、別言語とみなすことが現実的で賢明な選択であろう<sup>21</sup>。他方、日本語話者や喜界島の話者のように、いわば内側から考察する場合は、日本語（本土方言）との系統関係も明らかであり、体系的対応も見られる喜界島の言語を日本語の1つのヴァリエーションと考える方が妥当だと考えられる。国立国語研究所の報告書においても、沖縄、奄美の諸言語は方言、アイヌ語は系統関係が証明されていないので、独立した言語と見なしている。

## 5. 喜界島の言語文化保存会の活動

2010年の国立国語研究所の調査からすでに10年が経過し、喜界島の人口は

<sup>21</sup> カナダのラヴァル大学、ジャック・ルクレールによる「世界の言語一覧」においても、琉球方言に属する喜界島の言語は日本語とは別言語と見なされている。Jacques Leclere, *L'aménagement linguistique dans le monde*. Québec, TLFQ, Université Laval, <http://www.axl.cefano.ulaval.ca/index.html>

20%も減少した。このままの勢いで人口減少が続き、喜界島のことばの継承も行われぬなら、この言語が消滅するのは時間の問題であろう。言語の調査も今やらなければ全体的な記述は不可能になってしまう。文化庁の委託により国立国語研究所が行った大規模な調査は、学術的な記述文献として意味をもつだけではなく、長年「方言は悪いことば」という教育を受けてきた世代の人々には、地域の言語に対する評価を覆すきっかけとなったことであろう。しかし、学術調査だけでは言語を存続させることはできない。地域の話者達が主役となり、研究者や行政が協力して地域の言葉を子どもたちに伝えていくという活動を活性化しなければ、日本語（本土方言）の兄弟とも言える大切な一つの言語が消えてしまうことになる。

喜界島の島民の自主的な活動としては、「喜界町島ゆみた大会」<sup>22</sup>（2011年2月）の開催や「方言の日」の制定、インターネット・ラジオ「ラジオ喜界島」など新たな方言奨励のための活動が行われていることが2011年の実態調査でも報告されている。このほか、1965年創刊の同人誌『榕樹』は島の内外の有志によって発行されている。1992年からは月刊のミニコミ誌『わちゃ島通信』（「われわれの島通信」の意）が発行され、1993年には「上嘉鉄八月踊り唄保存会」が発足した。いずれの活動も現在に続いている。そして、2016年には、「わらび・しまゆみた狂言“附子”」の上演を機に「喜界島言語文化保存会」が発足した。「喜界島言語文化保存会」は、子ども達に島ユミタに翻訳した狂言を演じさせることを通じて方言を教えるという活動から生まれた。京都の狂言師河田全休氏に狂言の指導を仰ぎ、島の高齢者が方言指導を行って、本格的な狂言の上演となった<sup>23</sup>。この活動は、過去3回行われ、コロナ禍の今も子どもたちは練習に励んでいる。2019年には、島の集落の古い名前を残そうと、すべてのバス停に島ユミタの集落名を書いた表示板を設置するという事業をクラウドファンディングによって実現した。

<sup>22</sup> 喜界島の言語を現地では「島ユミタ」という。

<sup>23</sup> 喜界町ホームページ <https://www.town.kikai.lg.jp/kirari/20181127-1.html>

## 6. 武蔵大学における講演と反響

この喜界島言語文化保存会の活動の一つとして、2019年6月3日、武蔵大学において、同会代表、生島常範氏<sup>24</sup>による講演「喜界島の言語と文化」が行われた<sup>25</sup>。その講演の要旨と学生の反応から、このような危機言語の保存活動から私たちが学ぶことができるものはなにかを考えて行きたい。

講演は、「世界の言語と文化」という授業の一環として行われ、約200名の学生、及び、数名の教員、留学生、東京在住の喜界島出身者が受講した。「世界の言語と文化」という授業は、多様な言語やグローバル社会において活躍するために必要な態度、技能、知識などを学ぶ授業である。韓国語、中国語、フランス語、ドイツ語、英語など多様な外国語や文化への導入教育であると同時に、世界から見た日本語や日本文化への振り返りを促すことを目的としている。グローバル社会で活躍するためには、単に他者を知るだけではなく、他者との関係を作り出す必要がある。他者にとって興味ある存在でなければ、他者から交流を求められることもない。そのような意味で、私たちが生まれ育った言語文化は私たちの個性、アイデンティティーの一部として主体的にグローバル社会に貢献するための鍵となる。他者との交わりの中で、人は自分自身が何者であるかを問われ、再考することになる。そこで、振り返って自分の言語文化を見直したとき、本当の意味での交流が可能となるのである。

講演のプログラムは、次の通りである。

- ① 喜界島のことば「島ユミタ」での講師自己紹介
- ② ビデオによる喜界島の紹介
- ③ 喜界島言語文化保存会の活動
- ④ 喜界島のことばの紹介
- ⑤ 「しま唄」実演
- ⑥ 「八月踊り」を全員で実演

---

<sup>24</sup> 生島氏の活動については、加藤晴明、寺岡伸悟「奄美群島・喜界島と文化メディアーター」（2013年）に詳しくレポートされている。

<sup>25</sup> <https://www.musashi.ac.jp/news/20190610-01.html>

講演の内容をアンケート結果<sup>26</sup>とともにもう少し詳しく見て見よう。

① 「島ユミタ」による自己紹介。

まず、講師の生島氏による「島ユミタ」での自己紹介があった。これに対して、ほとんどの学生が「日本国内なのにことばの意味が分からず、衝撃を受けた」と答えている。

② ビデオによる喜界島の紹介

美しい島の風景、珊瑚礁の海にウミガメが悠々と泳ぐ映像は、南国の楽園を思わせる。行ってみたいという声は非常に多かった。また、島ユミタでお年寄りが語る姿は、「お年寄りが生き生きとしている島」と映ったようである。

③ 言語文化保存会の活動

特に小学生に島ユミタの狂言を演じさせるという試みは、生島氏と造形作家の緋月真歩さんとの出会いによって生まれた。生島氏は、それまでは島の伝統芸能をそのまま受け継ぐことが文化の保存と考えていたが、芸術家との出会いによって島外の人へも自信をもって発信できる格調の高い芸術的な活動となり、多くの人々の共感を得ている。

④ 言語の紹介

島ユミタの音韻の特徴、鼻濁音や有気音の存在、アクセントの特徴、慣用表現などを説明、日本語の古語にある表現が現在も生きていることや、小さい島でも、集落によることばの違いが大きい事などの説明があった。言語学者のような明晰な説明に、最初島ユミタを理解できないと言っていた学生も、対応関係をもう少し学べば分かるようになりそうだと言う人が多かった。また、有気音の存在に韓国語や中国語の分かる学生は、韓国語、中国語との共通点があることに驚いたようである。

⑤ 「しま唄」実演

講義の後は、生島氏自身が三線さんしんを演奏し、島唄を披露してくださった。とりわけ、沖縄と奄美の音階が異なることや、奄美の唄は、女性の声に合わせた高い音階で歌うことなどを実演付きで解説してくださった。

<sup>26</sup> 受講者約 250 名の中、アンケートに答えてくれた受講者は 97 名であった。

## ⑥ 「八月踊り」全員で実演

ここからは、机を大教室の脇に寄せて、全員が中央に輪になって「八月踊り」を踊った。学生の輪は外側、喜界島出身者の輪は内側になり、生島氏の太鼓に合わせて、受講者も一緒に踊った。全員が踊るにはスペースが狭すぎたが、留学生が率先して踊ってくれたため、学生も徐々に輪に加わり踊った。

総じて、学生達の反応は、グローバル社会で活躍するためには、外国のことば、文化を知る必要があると思っていたが、身近な日本の中にも、これまで知らなかった豊かな自然や文化があることに気づいたというものであった。特に、それは、そこに住む地域の人たちだけの問題ではなく、自分たちも関わることでできる自分たちの内側の問題であることを実感した人が多かった。もっと知りたい、行ってみたいという自発的に関わりを持つようとする意欲を語る学生も多かった。

## 7. おわりに：言語の消滅によって私たちは何を失うのか

本稿では、消滅の危機言語の復活を試みる新たな活動に注目し、そのような活動は私たち自身がグローバル社会との関わりにおいて大切にしなければいけない視点を提供してくれていることを考察してきた。ここで、再び、言語の消滅は何を意味しているのか、振り返ってみることにしよう。

ユネスコの『危機的な状況にある世界の言語地図』の「まえがき」に、ユネスコ事務局長イレヌ・ボコヴァが次のようなことばを寄せている。

「1つの言語の消滅はさまざまな点において人類の貧困化をもたらす。それぞれの言語は、話者の多少にかかわらず、その言語ならではのやり方で現実を認識し、組み立てている。たった1つの言語を失うこと、それは人類の知識と知性における進歩の力となる発見の可能性を放棄することである。1つの言語の消失は、必然的に、無形の文化財の消滅を招く。たとえば、舞台芸術、社会实践、儀式や祭事、伝統工芸、伝統の計り知れない遺産、そして、詩や冗談、ことわざ、伝説など共同体の口承表現の遺産の消失をもたらす。また、地域言語の消失は、

生物多様性をも侵害する。自然や宇宙に対する伝統的な知識、地域語によって表現された知的信条や文化的価値等は、実際、気候変動が新たに生み出した差し迫った脅威の出現によってますます危ういものになっている持続可能な自然資源の開発やエコシステムの管理において力を発揮するメカニズムなのである。」<sup>27</sup>

2020年現在、世界はコロナ禍に見舞われ、グローバル化のもたらす巨大な危うさと戦っている。同時にローカルな視点の大切さも再認識されつつある。しかし、一旦世界に開いた人々の目を再度閉じることはできない。私たちは、グローバルな社会の中で、ローカルな資源を育て、グローバル化が貧困化を招くことのないよう、豊かさに繋げる努力をしなければならない。個人がかかわる複数のコミュニティの関係も複雑化していく中、個人の努力が何に向けられるべきかという間に唯一の正解はない。しかし、肝心なことは、他者の価値観を知り、自己を振り返り育てることであり、他者と自己の複雑な価値観を調整する能力こそこれからの社会を生きる人々が身に付けなければならない能力であろう。

## 参考文献

アジェージュ、クロード 『絶滅していく言語を救うために 言葉の死とその再生』 糟谷啓介訳、白水社、2004年。

エヴァンズ、ニコラス 『危機言語』、京都大学学術出版会、大西正幸、長田俊樹、森若葉訳、2013年。

ガジュマル編集委員会 『<sup>がじゅまる</sup>榕樹』 35号、喜界島同人誌、2019年。

加藤晴明、寺岡伸悟 「奄美群島・喜界島と文化メディアーター—文化メディア学的視点から—」、『中京大学現代社会学部紀要 7-1』 2013年。

喜界島ちゅ文集 『くりはあ』 2019年。

衣畑智秀（研究代表者）、川澄哲也（研究員）、竹安大（研究員）「危機言語における言語使用の活性／不活性についての調査研究」、『福岡大学研究部論集』

---

<sup>27</sup> Christopher Moseley, (éd), *Op. Cit.*, pp.4-5.

- F5、2018年、pp.64-70, (1-7)。
- 木部暢子「日本の危機言語・方言—奄美・沖縄の親族名称・親族呼称—」東京外国語大学大学院国際日本学研究院『東京外国語大学国際日本学研究報告』no.5 p.10-19、2019年。
- 木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超 北原次郎太・山田真寛「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業報告書」、国立国語研究所、2011年2月。
- 木部暢子、窪園晴夫、下地賀代子、ローレンス・ウェイン、松森晶子、竹田晃子「消滅の危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書」国立国語研究所、2011年8月。
- 呉人恵『日本の危機言語 言語・方言の多様性と独自性』北海道大学出版会、2011年。
- <sup>こしらえ</sup>拵 嘉一郎『喜界島風土記』平凡社、1990年。
- 崎山理（編）『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題 国立民族学博物館調査報告 39』国立民族学博物館 2003年。
- 砂野幸稔（編）『多言語主義再考』三元社、2012年。
- 田窪行則、ジョン・ホイットマン、平子達也（編）『琉球諸語と古代日本語 日琉祖語の再建に向けて』くろしお出版、2016年。
- 西村淳子「ヨーロッパ多言語主義の可能性」『ヨーロッパ学入門』武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科編、朝日出版社、2013年。
- 藤田ラウンド幸世「宮古島の「現在」をドキュメントする：消滅危機言語の言語復興へのアプローチ」*Rikkyo ESD Journal* No.3-4, March 2019年。
- 町田 星羅、松井 真人「なぜ危機言語を維持すべきなのか —沖縄語の親族名称「ウツナイ」の意味と用法をめぐって—」『山形県立米沢女子短期大学紀要』(55), pp. 25-37, 2019-12-27。
- 三上絢子（編）『奄美諸島の諺集成』南方新社、2012年。
- 宮崎里司、杉野俊子 [編著]『グローバル化と言語政策 サステイナブルな共生社会・言語教育の構築に向けて』明石書店 2017年。
- 「わちゃ島通信」第74号、わちゃ島通信社、2017年。



柳田国男（編）、岩倉市郎（著）『喜界島方言集』、中央公論社、1941年。同書は、1977年国書刊行会から復刻版が出版されている。

Leclerc, Jacques, *L'aménagement linguistique dans le monde*, 2020 : <http://www.axl.cefano.ulaval.ca/index.html>

Moseley, Christopher (éd.) *Atlas des Langues en danger dans le monde*, Editions UNESCO, 2010.

UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages, "Language Vitality and Endangerment", Document submitted to the *International Expert Meeting on Unesco Programme Safeguarding of Endangered Languages*, Paris, 10-12, March 2003.

